

緑爽会会報 No. 151

2017年8月25日発行

日本山岳会 緑爽会

發行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

～～《報告》～～

夏らしい日の暑気払い

7月15日(十) 集会室

出席：22名（写真参照、撮影小泉義彦）

天候不順の夏。梅雨入りしたか、明けたかも判然としない時期であったので、一億総気象予報士の如く各自が勝手に解説をしていたが、暑気払いの日は、いかにもそれに相応しい猛暑となった。そんな中、遠方会員では、松本の田村さん、新潟から吉田さんが出席された。

懇親会に先立って、島田稔会員より、「高尾山のサポレン」についてお話があった。皆さんから頂戴したたくさんのお酒やお菓子などのお土産を机上にお話が始まった。

長年サポレンのボランティア活動をされている島田さんは、持参された資料（高尾山マップ・東京都発行の自然公園利用ルールガイドと東京都レンジャーのパンフ）を配布の上、ずっと立ったままでお話をされた。島田さんの丁寧で真摯な姿勢を改めて感じた。（報告：荒井正人）



緑爽会暑気払い 2017.7.15

小泉義彦、渡邊貞信、石塚嘉一、小原茂延、富澤克禮、深田森太郎、小林敏博、瀬戸英雄、荒井正人、小清水敏昌

川嶋新太郎、吉田理一、渡部温子、田井具世、大島洋子

夏原寿一、 梨羽時春、 松本恒廣、 田村佐喜子、 島田稔、 鳥橋祥子、 川口章子

高尾山のサポレン（サポート・レンジャー）について

島田 稔

「サポートレンジャー」とは、東京都のレンジャーをサポートするボランティア活動であり、奥多摩と高尾山エリアで、自然保護や保全の活動を行っている。

高尾山の活動では、エリアは北高尾・南高尾・奥高尾・裏高尾のほか滝山城址も含まれる。レンジャーとの共同活動と自主活動とがあり、月に5～6回、年間で70回以上、チームを組んで、巡回を行っている。レンジャーは数名でサポートレンジャーは60数名とのこと。自然保護のみならず、利用マナーの啓発、利用者の案内あるいは標識・看板の修理・補修も行う。奥多摩と比べると自然に対してというより人に対してのことが多いそうだ。例えばロープの張られたところでは、はみ出ないようにして道を守ったり、一方通行のルートを案内するなどである。

また花の調査も行う。高尾山にも希少種は多く、キンラン、ベニバナヤマシャクヤクなどの花を守ることも大切な任務である。何しろ年間300万人以上が訪れるところであり、年齢・国籍や山歩きの実験も様々であることから、マナー・ルールの啓発が求められるところである。もちろん事故も起こる。そうした面での注意喚起も必要という。

活動に当たってはユニホーム・帽子着用の上腕章を着けて行動すること。またスキルアップ研修もあるとのことだ。夏も冬も、こうした活動がなされているわけで、平成16年から活動を継続されている島田さんにはただただ感服である。

（報告・写真：荒井正人）



資料を手にお話しされる島田会員



ユニホーム・腕章（ともに赤）・帽子（青）

暑気払いに参加して

小林 敏博

この春、緑爽会に入会させていただきました小林敏博と申します。

4月の総会に初めて参加し、今回の暑気払いは2回目の会合への出席となります。日本山岳会入会以前に、長い歴史と伝統をもつ日本山岳会の雰囲気をも自分なりに想像しておりました。総会に参加し、緑爽会がその雰囲気をもっていることに大げさな表現ですが、感動をいたしました。

7月15日、島田稔さんの高尾サポートレンジャーとしての高尾山の自然環境との関わり方につ

乾杯の後、出席者おひとりお一人が近況報告をされました。皆さまのそれぞれ違った形での山の楽しみ方や山との関わりのお話をうかがいながら、自分の山歩きとは違う山との付き合い方がまだまだいろいろとあるのだなと改めて思い直し、自分の山の楽しみ方がさらに広がっていく可能性も感じました。席についた当初は、やや緊張しておりましたが、お酒が入るに従い、いろいろな方から気軽にお声をかけていただき、緑爽会の親しみやすさと温かさを感じることができました。文化の薫り高い、伝統ある緑爽会の活動に参加し、皆さま方から山についてのお話をうかがうとともに、山行へもご一緒できることを楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

「一生に一度、六十年近く、毎朝夕見続けている常念岳へ登りたい。」と友の願いを聞き、女三人で登ったのはいつだったろうか。林道で休んでいたら、登山口の届を見たとき、足早に登って来たのは、山田恒男さん、小屋のご主人だった。そして「・・・俺、黒ちゃん（田村の通称）より一歳年下・・・」と自慢げに言って一息入れる間もなく「飯の支度して待っているから気を付けて登って来いよ。」と飛ぶ様に追い越して行った。途中、昼食をすませたりして小屋に着いたのは3時頃か。一休みしての夕方、恒さんに「落日を見に行こう」と誘われ、喜んで小屋の裏手へついてゆく。大きく谷をへだて、槍、穂高、遠く後立山、薬師、立山、剣の方までも見える。黒いシルエットの一隅に沈む太陽に、皆感嘆の声を上げながらも、手はせっせとコケモモの実をつまんで口に運んでいる。「今日だけは特別に許可する。高山植物だから焼酎に漬けておけば不老不死（長寿）の妙薬だ。」厳かに宣うお言葉に本当か、嘘かとワイワイガヤガヤ言いながらも皆、手の平に一杯程の実をいただいた。（コケモモは大事に持ち帰り、家に帰って砂糖と焼酎に漬けた）

夜は、山にはもったいない程のもてなしに、ぜいたくな山小屋の一夜は過ぎていった。

翌朝五時前起床、身支度し、山頂を目指す。慣れない岩場の連続に悲鳴を上げる友を励まし、励まし、頂上（2857m）に登り、見た日の出の美しさ、大パノラマは忘れられない。「この360度の展望、大景観は、終生おぼえておきたい。」と友も感激している。

それから幾年月、「小屋はもう譲った。定年さ。」と恒さん。何年かは松本に過ごしていらしたが、「やっぱり山の方が良い」と再び登っていると聞いた。その後、何回目かのウェストン祭の時、3人のお孫さんと参加し、一番幼いお孫さんのヨチヨチ歩きを追いかけながら、「これ山の後継になれそうかい？」と嬉しそうに、笑みくずれていた顔を思い出す。

“今年に入って具合悪く、上田の方で静養”とか聞き、心配はしていたが、6月、新聞で訃報を知り、驚いた。また一人、大事な大事な山人を失った。

二十余年を経ても、コケモモ酒は私の家の戸棚にある。

“恒さんは、コケモモの酒、ちゃんと飲んでいたのかしら？”



新坂の一樹

小原 茂延

JRの市ヶ谷駅から日本山岳会本部へと向かう坂道は新坂との標柱がある。（四谷側は善国寺坂というようである）その登り切った左手に「東急番町ビル」が建っている。ビルは2011年の建築のようであるが、それ以前の建物が何であったかは私は知らない。その敷地の北西隅に一樹があって、11月後半から翌年初めまでイルミネーションに飾られるのはご存じかと思われる。この木は他の植栽と一緒に新ビルの外構として選定されたようである。

ある年のイルミネーションをよく覚えている。初めて緑爽会の忘年会に出席した年で、緑と青が基調であって、銀が混じっていたか、実に緑爽会をイメージしたが如くに派手さを抑えた好ましいものに思えた。

今年の夏は、新坂を行き来することが例年より多く、汗ばんで登って来ると、スッキリと伸びた

樹形を必ず見る。時にはカメラで撮るなどしてそのシンプルな美しさを愛でている。高さは既に 10m を優に越していようか。問題は、その樹種である。はじめ木肌と葉を一見してヒノキかサワラといった印象を持っていたのだが、葉を仔細に見ると、これがヒノキやサワラといった仲間の柔らかさではなく、モミやカヤあるいはイチイに似てやや硬さもあって明らかに違う。それからは図鑑を調べたり、ツリーに使われることからドイツトウヒとかツガ、モミの類かと悩んで検索したが判然としない。

葉の一部を持って、仲間で植物に詳しい方に見せたり、植物観察会で講師の人に尋ねるなどした。ラクウショウやメタセコイアでは？というので、冬場に落葉もしていないと言えば、黙ってしまう方、当方から葉は対生だと言えば、こんな複葉の小葉で、対生も互生も無いと言われる。どうやらメタセコイアとラクウショウの見分け方も承知していないインストラクターのようだ。その間も各種の図鑑にあたったり、樹名板の付いている公園などを訪ねて特定しようとしたが判明には至らなかった。

登山仲間には、花に詳しいねとか植物のことを知っているなどと言われ、自分も若干のことは心得ていたつもりだったが、検索を忠実に進めるだけの専門知識までは持ち合わせていないので、その小さな自負も消し飛んだ。数か月を経ても分からず、止む無くビルの方に聞くしかないと思い、管理部署を訪ねて来意を告げると担当者も分からない。外構工事の植栽図に名称がある筈と、お願いして 102 号資料室で作業していると電話が鳴って回答を得た。その名はセンペルセコイア！であった。かのカリフォルニアで見られる巨木のセコイアの一種で、セコイアは常緑高木だったのだ。あまりにメタセコイアに慣れてしまったのか、やんぬるかな！の一語が大きく目の前にあった。メタセコイアは、発見者の三木茂博士により、セコイアに「のちの、変わった」という接頭語である「メタ」を付して名付けられて 1941 年に学会に発表されたそうで、セコイア類は落葉樹と思い込んでしまっていたのである。セコイアは樹高 110m にもなる巨木で知られ、学名は *Sequoia sempervirens* で英名 California Redwood 名の由来は 1821 年頃にチェロキー文字を発明したチェロキー族インディアン賢人、シクウォイア(セコイア)に因んでの命名という。

日本の山岳の美は、森林(深林)と溪谷にあると讃えた田部重治、その先輩であり近代登山の先覚者の 1 人でもある木暮理太郎は幼年の頃から秩父に憧憬し、自然保護の何であるか身を持って示した大きな精神の人でもあった。富山出身の田部重治と北アルプスの縦走を案内人なしで踏破した探検時代の登山家でもあり、その業績と為人は高く評価され、第 3 代日本山岳会会長を務めているのは周知のことである。山岳展望の境地を示したり、晩年はヒマラヤ研究に目を向けた炯眼の士でもある。奥秩父の金峰山を望む金山平に顕彰碑があり木暮祭も行われているが、生誕の地である群馬県太田市寺井地区蛇川の畔にも記念碑がある。先年、緑爽会の講演で南川金一氏が紹介されていたように、碑の撰文は西堀栄三郎で「山登りは先人の肩にのって先へ上へ進むものだ」とある。これはヨーロッパの古い伝説に基づく言葉が原典で、かの万有引力で名高いニュートンも引用している。

どの分野でも、「温故知新」なり、「原点に帰れ」といった言葉は忘れてはいけない。自然保護も愛護の精神も、しばしば振り返って方向と意義に見誤ったものは無いか、新たな指向と情熱に欠けているものは無いか、活動のための活動に陥ってないか等々、確認して進むことが大事で、偏向や本来と異なった考えに突っ走っていないかなど、任に当たる組織も個人にあっても、その時の立場から少し離れて見渡す器量を忘れてはならない。ここ数年来、思うこと切である。

《追悼～奥野道治さんを偲んで》

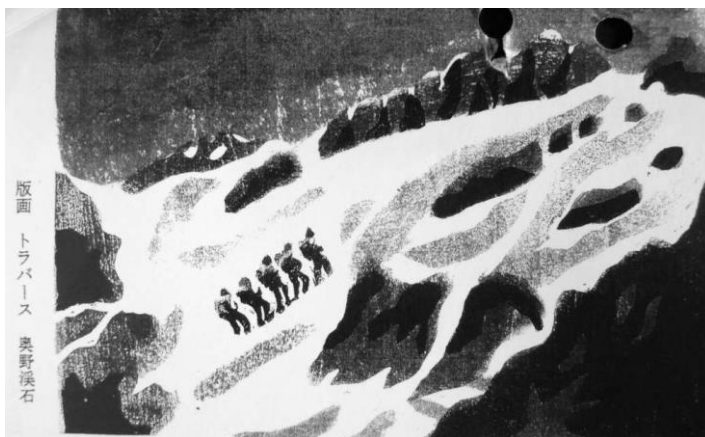
緑爽会で最高齢であった奥野道治さんが6月に亡くなりました。お二人から追悼文をいただきましたので、奥野さんの版画を2点再録し、在りし日を偲びたいと思います。

多彩な趣味人の奥野さんが逝った

関塚 貞亨

緑爽会の最年長会員の奥野さんが6月8日に亡くなられた。94歳だった。

奥野さんは東京大学を出て大手商社に勤務していた頃から余暇には多彩な趣味をたしなみ、定年後に趣味人としての人生に磨きがかかった人だと思っている。山岳会に入っただけで自由人になってからだから、私が知りあったのは奥野さんが自然保護委員になった1986年頃で、神宮前の自宅にアトリエ兼ギャラリーを持っていて、山林美術協会の会員で森林問題にも詳しいことが判った。そして1987年に自然保護委員会に設置した小委員会が作成した「森林保護への提言」(会報512号参照)では貴重な意見を頂いた。



そして渡辺正臣前自然保護委員長が発案で委員の松丸秀夫さん、服部和光のディスプレイ・チーフデザイナーだった遠藤光男さんを発起人として91年1月に発足した「美術倶楽部サン燦会」の中心となって活躍したのは奥野さんだった。発足当初は会員も20人前後で、年末に奥野さんのギャラリーで作品を持ち寄り、忘年会を兼ねて展覧会を開くこと、年が明けて2月の初旬に会員にきた美しい年賀状を持ち寄り披露する賀状展覧会の開催も奥野さんの発案で、以後は恒例行事となった。

「サン燦会」は山岳会に迷惑をかけたくないとして同好会の申請を控えていたが、山岳会90周年記念の晩餐会にアルパインスケッチ・クラブによる展覧会が併設されることになったので、我がクラブも共同で展示したいと申し入れ、同時に同好会の申請を行い奥野さんが代表に就任して、90歳近くまでほぼ20年間代表としてご苦労をお願いした。

またドイツのロマンチック街道に1か月以上滞在して南ドイツの文化を識るなど海外の1地方に長期滞在するロング・ステイ・クラブを主宰して、海外長期滞在旅行を毎年のように実施し、東大OB、海外旅行のメンバーなどとの交流を通じて知り合った人を中心とした趣味の懇親会をギャラリーで開催するなど、多彩な趣味人として充実した日々を送っておられた。

一例をあげればイタリア大使を招いてイタリア料理店で懇談会を持つ、関西地震のあと旧建設省OBを招き耐震建築について聞くなどの会合に同席したことがあり、自然保護委員だった織内信彦さん、早稲田大学教授の木名瀬亘さんと同席したのを記憶している。

山林美術協会では木版画を多く発表しているが、緑爽会の会合で木版画教室を開いたことがあったと臆気ながら記憶している。また年末の会合でベートーベンの第9の合唱の一節を朗々と歌ったこともあった。

90歳を前にサン燦会代表を退くときに「生前葬を開いたから引退する」と語り、杉並区桃井の老人ホームに入居し、その後も会合には出席していたが、昨年の後半から欠席するようになり、今年3月に「がん手術後、娘のところで療養している」との手紙を頂いた後は連絡が途絶え、東大OBや同好会にも連絡がないまま、ひっそりと旅立った。おそらく川の向うで旧友たちと再び交流を楽しんでいると思っている。

一見寡黙な奥野さん気配りのひと

渡部 温子

奥野さんの訃報を聞いたとき、再入院と聞いているのに会いに行くことをためらっていた意気地なさを悔いました。それは奥野さんがスイスで買い求められたミルクポットの絵を描いたのですが、「ここをこうするといいよ」と言われて直した絵を見せに行くと言いながら、とうとう見てもうことができなかったからでした。寡黙でありながら辛口家でもあり、また駄洒落を飛ばすなど、ユーモアたっぷりの面もあり、話すと笑いが絶えず、楽しかったことが多くて亡くなられたのが本当に残念です。山行でも会合でも一緒にいる機会は少なかったのですが、会えば密度の濃い沢山の助言をいただきました。緑爽会でも、絵画ばかりでなく、林野にかかわることとか、役人の裏話とか、お話を聞けるチャンスが幾つもあったのに、思い至らなかった自分が情けないです。

奥野さんは傍らから見ても愛妻家でした。神宮前のアトリエでの新年会とき、スープを作って持参しました。食べ始めてすぐに奥野さんがマグカップを手に「余っていたら少し分けてください」と来て、そのままアトリエを飛び出すように出て行かれました。スープは隣にあるご自宅の奥様に運ばれたと聞き強烈な印象として残りました。またあるとき、会合で出た生菓子を紙にくるまれてバッグに。思い切って「お口に合いませんでしたか？」と聞いたら、何とも照れくさそうな笑顔で「美味しそうなので家内と一緒に分けていただきます」と。今さら聞いた私が阿呆でした！

先日、NHKのテレビ番組「ふるカフェ」で京都の吉田山が出ました。テレビに出る画面を見ていて、奥野さんが漏らした一言「吉田山に寄りたいところがあった」を突然思い出しました。吉田山のどこに行きたかったのか、何があったのか聞けばよかったと、今ごろになって思いを巡らしています。京都の町中を両手にストック持って歩く姿に振り返る人もいました。疎水沿いにある哲学の道から宿に行くには急な階段があり、足が痛いとは言われませんでしたが、それはご様子で察するだけでした。同行者に気を使わせないようにと気遣っているのがよく分かります。

箱根に行ったとき、奥野さんは杖なしで歩いておられるではありませんか。聞いたら「医者にはカネを取るばかりで治らない。ならばその費用を使い自分で治すと決めたと、後輩の医者の意見を聞きながらグルコサミンを喰ったが、どこのメーカーのグルコサミンが効いたのか分からない」と、至極真面目に言われ、自分からはからかわれているのかと思いました。

雪山を数人が歩いている版画をいただいたことがあります。お礼のとき、「春山で1人ばてしていますよね」と言ったら大笑いをして「嬉しいねえ」と言ってくれたのですが、真実は聞かずじまい……。今、原稿は書き終わっているのに、こういう思い出が次から次へと浮かんできます。



～～ 《予告など》 ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

9月山行:9月30日(土)～10月1日(日)

秋の高原散歩～日野春アルプ美術館で中村好至恵さんの個展を鑑賞し、長沢会員経営のロッジ山旅に泊まります。翌日は長沢さんにとっておきの山をご案内いただく予定です。

<日程>

1日目:JR 中央本線「日野春駅」15時20分集合。車で日野春アルプ美術館へ。

個展鑑賞後ロッジ山旅へ移動。入浴・夕食

2日目:朝食後車で登山口へ。下山後解散。

※山については近辺に詳しい長沢さんが諸状況を考慮して決めます。

<集合>上記の通り。新宿駅13時発「あずさ17号」。甲府で各駅停車に乗り換えて15:09日野春着。

もしくはロッジ直行をお願いします。(17時頃までに到着)

<宿泊>ロッジ山旅一泊二食付き8500円。(電話0551-20-5634)

<申込>手配の関係もあり、9月17日までにお願いします。

<申込先>担当:荒井正人



10月懇談会＝10月30日(月) 18時～ 104号室

(日程が変更になっています！ 会報 150 号では10月26日とお知らせしましたが、会場の関係から変更となりましたので、ご注意願います。)

山本良子会員に「数字の意味—JAC の先人の思いを通して考える」というテーマでお話しをいただきますが、参加者の皆様も山本さんとの会話を楽しんでいただけるように懇談会形式で行ないます。

会報「山」にも告知いたします。

11月山行:実施日11月27日(月) 担当:渡邊貞信、夏原寿一 詳細は次号にて。

<会費納入について>

すでに会報でお知らせしているところですが、まだ今年度会費が未納の方は、148号に掲載している方法にて納入願います。

<会員名簿の充実>

名簿への携帯番号・ファックス・PC アドレス開示についてご協力をお願いいたします。連絡は夏原さんまで。

--- 編集後記 -----

奥野道治さんが亡くなりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。関塚さんの原稿を拝見して、ハッと気づいたのは、忘年会で第9を歌われた場に入会まもない私もいたことでした。

ようやく夏らしい暑さが戻りましたが、暑くなれば今度は早く涼しさが戻ってほしいだなんて全く勝手なものです。全国どこでもこんなおかしい天気だったのでしょうか。

今回田村さんが文章をお寄せくださいました。ぜひ全国から、10月発行の会報原稿を寄せくださいますようお願いいたします。

<次号予告> 10月25日発行の主な内容

報告: 9月山行報告

投稿・寄稿: 小泉義彦会員「滝子山」